

東京都三多摩公立博物館協議会会報

# ミュージアム多摩

## No. 31

～特集 多摩の世界天文年～



雲の向こうにうっすらと見えた、部分日食

2010.3

東京都三多摩公立博物館協議会

## 目次

### 【多摩の世界天文年】

ガリレオと皆既日食	多摩六都科学館	高柳雄一	1
多摩地域を中心に実施された「第1回東京国際科学フェスティバル」			
— 宇宙・生命・地球、そしてわたしたち —	国立天文台	縣 秀彦	2
地域を見直し、「世界天文年」に初挑戦	調布市郷土博物館	平 自由	4
冬の星空ウォッチング ～2009 世界天文年～	くにたち郷土文化館	齊藤有里加	4
世界天文年 2009 企画展示 日食写真展について	府中市郷土の森博物館	本間隆幸	5
企画展「天体観測と時計」世界天文年 2009 日本委員会公認企画	町田市立博物館	矢島律子・真下尚以	5
日食と世界天文年イベント	八王子市こども科学館(サイエンスドーム八王子)	森 融	6
歴史民俗資料館における自然系事業の取り組み	武蔵村山市立歴史民俗資料館	石川悦子	8
2009 年日食フィーバー	東大和市立郷土博物館	野崎洋子	8

### 【会員館活動報告】

東村山ふるさと歴史館	石川正行	9
八王子市郷土資料館	紺野英二	9
府中市郷土の森博物館	花木知子	10
青梅市郷土博物館	川島直之	11
調布市郷土博物館	長瀬 衛	12
瑞穂町郷土資料館	高田賢治	12
奥多摩水と緑のふれあい館	堀口行雄	13
福生市郷土資料室	菱山栄三郎	13
羽村市郷土博物館	河村康博	14
清瀬市郷土博物館	柳澤 剛	15
立川市歴史民俗資料館	小川 始	16
小金井市文化財センター	伊藤富治夫	16
日野市郷土資料館	白川未来	17
檜原村郷土資料館	吉沢文夫	17
くにたち郷土文化館	高橋秀之	18
東大和市立郷土博物館	野崎洋子	18
パルテノン多摩歴史ミュージアム	仙仁 径	19
東京農工大科学博物館	松島朝秀	20
江戸東京たてもの園	高橋英久	21
国立ハンセン病資料館	西浦直子	21
東京都埋蔵文化財センター	小葉一夫	22
集合住宅歴史館	野原亜沙子	22
多摩六都科学館	玉井久雄	23
たましん地域文化財団	坂田宏之	23

### 【新規入会館紹介】

国立天文台天文機器資料館	中桐正夫	24
--------------	------	----

【会員名簿】	裏表紙
--------	-----

## ◆多摩の世界天文年◆

## ガリレオと皆既日食

多摩六都科学館 高柳雄一

望遠鏡が発明された噂を聞いたガリレオ・ガリレイが、それを自作し夜空に向けて宇宙を観測したのは1609年。この年は人間が宇宙への新しい扉を手に入れた記念すべき年になりました。それから数えて400年の節目として、国際連合、ユネスコ、国際天文学連合は2009年を世界天文年と決めました。世界中で色々な世界天文年のイベントが行われ、日本でも地域の科学館・プラネタリウムなどが数々のイベントを行いました。

世界天文年で使われたスローガンは「宇宙…解き明かすのはあなた」。世界天文年を機会に一人でも多くの人が空を見上げ宇宙の中の地球、そこに住む生命と人間に思いを馳せ、宇宙を解き明かす人間の営みを持つ意味に気づいてもらいたいという願いが込められています。

世界天文年はガリレオの業績を記念したもの。イベントではガリレオが自作した望遠鏡やガリレオが発見した天体の話題が多く取り上げられました。日本ではもう一つ取り上げられた話題があります。それは2009年7月22日、日本近海で見られた皆既日食に関係したイベントです。皆既日食そのものは、月の影が走る帯状の限られた地域でしか見ることはできません。しかし部分食なら日本全国で見ることができます。昼間、空に異変をもたらす日食は人々の興味を空に、さらには宇宙に向ける絶好の機会です。それだけに日食に関係したイベントが日本全国の科学館・プラネタリウムで行われました。

多摩六都科学館でも世界天文年イベントはこの二つの話題に分けることができます。まず日時が既に決まっている日食の場合、イベントもそれに合わせて実施しました。日食が7月22日ですから、春から夏にかけてのイベントは、多摩六都科学館を構成する圏域五市の小・中学校10校へ科学館スタッフが出前授業にかけ、6月20日から7月18日までの毎週土曜日、5回に分けて日食についての事前学習会「日食教室」を開きました。この教室では、日食現象についての解説、日食グラスを使った太陽観察の方法、実施の際の注意点、さらには多摩六都科学館が開発したピンホール望遠鏡の工作を行いました。このイベントの参加数は計2275人です。

日食前々日の7月20日には、長年皆既日食を観測し太陽研究で知られる東京大学名誉教授・西恵三先生を科学館のイベントホールにお招きし「サイエンスカフェ日食」を開きました。日食当日の7月22日は日食観察会「木もれ日観察」を科学館の館庭で行いました。ここではプラネタリウム解説員による「望遠鏡と日食グラスでの観察」、ボランティアスタッフによる「木もれ日観察」を目論みました。木もれ日観察では木もれ日が生み出すピンホール効果で地表に現れる三日月形太陽像の観察を試みましたが、野外での試みは生憎の曇天でほとんど観察

はできませんでした。ただ、空の一部が薄雲になり、雲越しの三日月形太陽の姿を捉えることができたとき人々から大きな歓声が起こったということです。この日、イベントホールでは独立行政法人宇宙航空研究開発機構と財団法人日本宇宙少年団との協力をいただき、中継衛星「きずな」を使った「小笠原とのライブ中継」も同時開催され、来館者は小笠原での日食も楽しむことができました。

この日はプラネタリウムでも日食特別投影番組を午後3回実施しました。特に最終回の投影では「サイエンスカフェ日食」の講師を務めた西恵三先生の特別解説があり、日食で太陽に興味を持った多くの観客たちに印象深い話題を提供する場となりました。夏休みのビッグイベントであった日食に出会い、太陽に興味を持った子どもたちには7月25日から8月31日まで夏の特別イベント「太陽とあそぼう」をイベントホールで実施しました。内容は7月の皆既日食の映像も含め太陽をテーマとした多角的な展示を用意し、日食の仕組みや太陽光に含まれる赤外線などを学ぶ実験ショーを毎日実施し、ワークショップでは偏光万華鏡工作、ソーラーカー工作、太陽熱気球実験なども行いました。この期間の総来場者数は16800名にのびります。

皆既日食後の世界天文年イベントはこの年の中心人物ガリレオが話題を占めます。10月17日から始めたプラネタリウム一般投影番組「ガリレオ・ガリレイ」では「地動説の提唱」をはじめ、望遠鏡を空に向け、夜空に肉眼では見えない無数の星を発見し、昼間の太陽黒点の観察、木星を回る4大衛星の発見など天文学の発展に大きく貢献したガリレオの業績を紹介しました。この間の総観覧者数は2561名です。また12月27日の年内最終のプラネタリウム番組「とっておきの天文講座」ではガリレオの一生を取り上げて紹介し、現代の私たちがガリレオから学べるものについて、参加した100名近い皆さんと話し合う場を設け、多摩六都科学館として世界天文年イベントのまとめとしました。

都会の夜空から肉眼で見える星たちの世界はますます遠くなってきています。子どもたちにとって、今ではガリレオが望遠鏡を通して見た天体の世界に感じた驚きはなかなか想像ができないかもしれません。そんな中で、世界天文年のイベントではガリレオの手作り望遠鏡を工作する「やさしい天文教室」も11月に開かれました。自分で作った小さな望遠鏡で天体を眺めたときの喜びを子どもたちがいつまでも記憶に残してくれるなら、それは世界天文年に子どもたちが手に入れた貴重な体験になると信じて、多摩六都科学館が世界天文年に実施したイベントの報告といたします。

# 多摩地域を中心に実施された「第1回東京国際科学フェスティバル」

## — 宇宙・生命・地球、そしてわたしたち —

国立天文台 縣 秀彦

### 1. 都内 3 万人が楽しんだ第 1 回 TISF

世界天文年 2009 の地域での取り組みとして、「科学を文化に！」を合い言葉に、「第 1 回東京国際科学フェスティバル (Tokyo International Science Festival: TISF)」が 9 月 12 日 (土) ~ 27 日 (日) に、三鷹市を中心に調布市、府中市、武蔵野市、小金井市、国分寺市など都内全域で開催されました。この間 86 団体・個人が主催する 110 を超えるイベントが実施され、全体で約 3 万人の参加者を集めることができました。府中市郷土の森博物館、調布市郷土博物館、八王子市子ども科学館をはじめ三博協に加盟する多くの館が趣旨に賛同して下さりご協力をいただきました。主催者を代表してお礼の言葉を述べさせていただくとともに、第 1 回 TISF のご報告、さらに第 2 回 TISF (<http://tokyo.sci-fest.net/>) への参加を呼びかけさせていただこうと思います。



写真：三鷹市内に飾られたフラッグ

### 2. TISF の趣旨と第 1 回実行委員会の紹介

地球環境、エネルギー・資源、人口、食糧、地域紛争など、人類と地球の持続可能性を脅かす現代の課題を解決するためには、現代社会に生きる私たちが、科学の発展を基盤として、互いに多様性を認めあい、共に考え、諸課題を解決しつつ、共に生き合う社会を築くことが重要です。そこで、科学を楽しみ技術に親しむ人々の「地域の絆」をまずは育もうと、国立天文台が発案し、(財)日本科学技術振興財団(科学技術館)の有馬朗人会長や、観山正見国立天文台長、清原慶子三鷹市長等が呼びかけ人となり、第 1 回 TISF 実行委員会が組織されました。実行委員会には趣旨に賛同する個人・団体の誰もが参加可能です。呼びかけに対し 86 の団体・個人が実行委員会に登録しました。国際基督教大学の北原和夫教授を委員長に運営委員会を組織し、国立天文台科学文化形

成ユニットが事務局の中心となって第 1 回 TISF が運営されました。実行委員会組織の全容や規約については、<http://tokyo.sci-fest.net/ja/about/committee.html> をご参照下さい。

### 3. 世界と日本の科学祭

サイエンス・フェスティバルは、特に英国で盛んな科学コミュニケーション活動で、英国各地で年間 15 都市以上で科学祭が開催されています。1989 年に始まったエジンバラ国際科学祭が最も有名で、毎年イースターの時期に 2 週間開催され、7 万人を超える参加者を集めています。また、ヨーロッパや米国でも科学祭が次第に増えつつあります。日本では、米国 AAAS の活動を参考に、2006 年秋より JST が主催する「サイエンスアゴラ (<http://www.scienceagora.org/>)」がお台場で実施されるようになりました。

一方、日本では「青少年のための科学の祭典」が、1992 年に科学技術館で始まり、現在では全国 101 会場、42 万人 (2008 年) の参加者を集めるまでに成長しています。子どもたちを対象にする科学の祭典に、大人も楽しめるコミュニケーション活動を加えることで、日本各地で科学祭を実施することを筆者等は目指しています。世界天文年の 2009 年には、8 月に函館国際科学祭 (8500 人参加)、9 月に東京国際科学フェスティバル (3 万人参加) がスタートし、日本における科学祭元年となりました。

科学祭とは、地域における「科学好き市民」のコミュニティ形成の場 (繋ぐ広場) であり、市民や子どもたちが科学に親しむお祭り (科学の祝祭) であると定義しています。また、企業、大学・研究機関、生涯学習施設、学校教育、行政等の地域での科学コミュニケーションの交流の場でもあり、さらに科学文化の街としての観光資源ともなると考えられています。

### 4. 市民が主体の科学祭 T I S F

東京には、国内外に向けて情報発信をしている大学、研究機関、地場産業、博物館などが居住地域のなかに密集し、科学、技術、文化が、生活の場と隣り合わせで存在しています。また、国際的な草の根交流が盛んであることもこの地域の特徴です。この地域の特徴を活かし、世界天文年 2009、ダーウィン生誕 200 年、「種の起原」刊行 150 年を記念して、第 1 回科学フェスティバルは創設されました。

110 を超えるイベントとは、講演会、サイエンス・カフェ、サイエンス・ショー、音楽とのコラボレーション、



工作教室（君もガリレオ望遠鏡制作など）、天体観望会、スタンプラリー、施設公開、科学の祭典東京大会、宇宙の日ふれあいフェスティバル等々です。

第1回 TISF の最大の特徴は、110 を越えるイベントの主催者 86 団体・個人の約半数が自治体や研究・教育機関、企業などではない市民グループや個人が主催したイベントであったことです。例えば、三鷹市の福祉事業施設「星と風のカフェ」<http://www2.bbweb-arena.com/hshcafe/> では、期間中 16 日間で 20 回のサイエンス・カフェが行われましたが、そのうち 19 回は、毎週木曜日に星と風のカフェで実施されている「星と風のサロン」に集まってくる市民の皆さんが自ら提案し実施した企画でした。

今回の TISF の活動より、科学全般に興味・関心を持ち、地域で主体的に活動をしたいと思う市民層が都市部では一定数存在すること、そのような市民に向けての学术界や博物館からのアプローチがまったく不足していることが明確になりました。地域を活性化し、科学好きの市民を孤立させないこと、科学好きの子どもや大人を増やすこと、さらに、科学を理解し政策判断が出来る人を増やす上で、地域における科学祭の実施は有効であり、今後、重要性を増すと推察されます。

また、三鷹市は今回、「三鷹の森科学祭」と全体企画を準備し、TISF 実行委員会と連動して、三鷹市全体を 13 億分の 1 にスケールダウンした太陽系に見立て、JR 三鷹駅に置いた直径 1 メートルの太陽を中心に、水・金・地・火・木・土・天・海・冥と惑星・準惑星のゾーンを作り、地元の商店会から 50 軒を超えるお店がスタンプラリーに協力して下さいました。この期間、三鷹駅前の通りには、FC 東京の旗に代わって TISF のフラグが 300 本以上はためいて、なかなかの壮観でした。三鷹駅前やジブリ美術館でも観望会が開催されるなど、三鷹市全体が星と宇宙に親しむイベントとなりました。ふとん屋さん、呉服屋さん、お蕎麦屋さん、喫茶店、レストラン等々、実にたくさんの業種のみなさん、そのほとんどが普段は天文や科学にあまり関心の無い商店の皆さんが、この東京国際科学フェスティバルに参加して下さいましたことで、科学を文化として捉える第一歩が踏み出せたような気がします。

## 5. ソーシャル・カルティベーションとは？

国立天文台「科学文化形成ユニット」は、JST の地域の学び舎推進事業を 2009 年度に受託し「東京サイエンスネットワーク - 地域の絆を世界の絆に -」(09-11 年度)事業を実施しています。地域で孤立している科学好きの

市民や、今まで関心を持たなかった人をも科学に接する機会、地域における科学の絆を創出することを目的として、東京国際科学フェスティバル事業、さらに日常的なソーシャル・カルティベーション事業という二つの事業を柱として地域でのネットワーク構築を進めています。

ソーシャル・カルティベーション事業とは、市民活動や地域社会に根ざした科学文化の定着を目標とし、国立天文台と三鷹市等との間で取り組んでいる「星と風のサロン」や「アストロノミー・パブ」等の事業をモデルケースとして、地域拠点のネットワーク設立を目指す事業です。みなさんの街でも、ぜひ、ソーシャル・カルティベーション事業に関心を持っていただき、私たちと連携して地域の日常的な活動の環を広げていただければと希望しています。

## 6. 第2回 TISF に参加しよう

2010 年 9 月 11 日（土）～ 10 月 10 日（日）に会期 30 日間に拡大して第 2 回東京国際科学フェスティバルが開催されます。テーマは、2010 年は国際生物多様性年ということで、「いのちの星 地球 ～ Science for Life ～」。

参加は次の 5 つの形態で募集しています。応募締切は 5 月 31 日（月）までです。

- (1) 個別企画の実施参加（企画会員）
- (2) ブース・ポスター展示などの出展・発表参加（出展会員）
- (3) 会場施設などの提供参加（会場会員）
- (4) スタッフとしての参加（スタッフ会員）
- (5) 協賛など支援者としての参加（協賛会員）

ぜひ、皆さんの博物館でも、<http://tokyo.sci-fest.net/ja/apply/entry.html> より参加申し込みをよろしく願います！



写真：移動プラネタリウム

## 地域を見直し、「世界天文年」に初挑戦

調布市郷土博物館 平 自由

### 「世界天文年」と三博協 30 年

2009 年は、私たちの三博協が生まれて 30 年の区切りの年でありました。たまたま本館が会長館であったため、この年はどんな年なのかと話し合う中で、ガリレオの天体観測から 400 年の世界天文年であることを知りました。隣接する三鷹市大沢に国立天文台がありますが、古墳の発掘調査で見学させていただいたことしかありませんでした。また、市内には、深大寺東町に宇宙航空研究開発機構（JAXA）と調布ヶ丘・富士見町に電気通信大学があり、見学できる施設があると聞いていました。多くの市民にとってもそれほど身近な所ではないだろうと、思いきって打診してみました。

それぞれ、地元博物館との交流を歓迎していただき、協力をいただけることとなり、5 月の三博協の総会には国立天文台天文情報センター普及室長の縣先生に記念講演をしていただき、多摩地区の多くの博物館と交流を深めることができました。本館では、これらの機関の協力を得て、企画展示と「子どもはくぶつかん」を実施することができました。

### 企画展「天文と暦のある暮らし」

自前の展示資料はわずかでしたが、国立天文台からは貴重な図書資料や昔の観測機器、JAXA からは最新の映像資料やロケットなどの大型の模型をお借りし、古文書や暦、時計などを通して、天文と人々の暮らしの結びつきを感じることができる展示になりました。

### 子どもはくぶつかん

#### 「デジタルプラネタリウムで見る宇宙」

本館 2 階の常設展示の可動展示ケースを 1 日だけ移動し、業者に委託して定員 30 人の仮設のドームを設置し、午後に各 30 分で 4 回、夏の星空を投影し、解説を親子で楽しみました。展示は即日復旧しました。

### 子どもはくぶつかん

#### 「天文とスペースサイエンスツアー」

市の大型バスで 3 か所を回り、電気通信大学では、富澤一郎先生に「通信と天文の深い結びつき」の話を聴き、通信施設と UEC コミュニケーションミュージアムを見学しました。国立天文台では、3 班に分かれ、解説員の案内で広い構内を見学し、昼食をとり自由散策をしました。JAXA では、3 班に解説員がついて、展示室を見学した後、スペースミッションシュミレータ体験の後、本物の「ホープ-X」を見学し、お土産もたくさんいただきました。

2009 年を振り返ってみると、「天文」は 7 月の皆既日食で例年になく盛り上がり、その後、国立天文台が三博協に新しい仲間として加盟申請をされたと聞くにおよび、三博協 30 周年にふさわしい年になったと思います。



天文と暦のある暮らし・展示風景

## 冬の星空ウォッチング ～2009世界天文年～

くにたち郷土文化館 齊藤有里加

くにたち郷土文化館では毎年、冬の星空ウォッチングを実施しています。本年度は世界天文年ということで「月と木星」「スバルとアンドロメダ星雲」「オリオン星雲」の 3 回でのべ 233 人が参加しました。参加者からは「木星の衛星はいくつですか」「流星群はどの方向に見えるのですか？」等、今年話題に上がっている天文イベントの質問が盛んに行なわれました。最終回では、「今日は宇宙ステーションが見えるようですよ！」との情報が。曇り空の中、全員でじっと夜空を見つめました。雲の隙間からの一瞬の出来事でしたが、参加者から歓声が上がりました。

国立市の夜空も年々明るくなっていますが、地元の夜空を見上げる機会をこれからもつくっていききたいと思います。



星空ウォッチングのようす



観察に使った大型望遠鏡



## 世界天文年2009 企画展示 日食写真展について

府中市郷土の森博物館 本間隆幸

2009年、世界天文年の7月22日、日本の陸地で実に46年ぶりの皆既日食が起きました。また東京では、部分日食が見られることになっていました。この機会に、日食や太陽のことに興味・関心を持ってもらおうと展示や関連事業をしました。



日食写真展の様子

今回展示した世界各国で見られた皆既日食や金環日食の写真は、東京理科大学天文研究部OB会から、7月22日の皆既日食の写真は、国立天文台からお借りしました。今回の目玉は、一般初公開となる、明治20年の北関東・東北部で見られた日食のスケッチでした。当時の政府が皆既日食の見える地域に日食のスケッチを奨

励した結果、多くの地域でスケッチがとられ、それが東京天文台（現国立天文台）で保管され、昨年再発見されたものでした。また、明治時代に起きた日食の様子を描いた錦絵も国立天文台の協力によって紹介できました（一部当館蔵）。最近の科学的な成果としては、宇宙からとらえた日食の様子と、その様子をとらえた太陽観測衛星の模型をJAXA宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究本部の協力によって展示しました。観覧された方は、写真やスケッチ、錦絵などを多くの方が熱心に、興味深くご覧になっていました。

関連事業として、期間中の土・日曜日、祝日には、全天周映画「黒い太陽」の無料上映を行いました。プラネタリウム最終投影の後にも関わらず、期間中1000名もの方にご覧いただくことができました。さらに、日食当日には、日食特別観望会を行い、曇り空の中200名の方が博物館前に集まり、日食を短い時間でしか肉眼で観望しました。その際に起こった歓声は夕方のNHKのラジオにも使われました。

今年は、世界天文年だったため盛り上がりを作りやすかったのですが、終わったこれからも、プラネタリウム投影や展示、観望会などをおして星や宇宙のことを多くの方に伝えていきたいと思えます。

## 企画展「天体観測と時計」世界天文年2009日本委員会公認企画

町田市立博物館 矢島律子・真下尚以

当館は、2009年度において企画展を5回開催しました。その中から、2009年7月18日から8月30日まで開催されました「天体観測と時計」について、ご報告します。

天体観測で使われる重要な道具のひとつが「時計」です。日食や月食、そして流星などの天体観測、これらはすべて正確な「時」の測定を必要とします。「時」はもともと天体の子午線上を通過する瞬間を観測して決められたものです。この「時」に時計を合わせて天体観測や社会生活に利用しています。そこで、天体観測と「時」や時計の間には、深い関係があることをわかりやすく紹介しました。

もうひとつのテーマとして日本における天体観測や時計製作の歴史を展示しました。特に約30件展示した和時計は、独自の「時」の概念に基づいて機巧を作り出しただけでなく、装飾性にも優れています。その魅力を再発見するとともに、現代までも脈々と受け継がれている日本の時計技術のすばらしさをご観覧いただきました。

この展覧会では、玉川大学芸術学部メディア・アーツ学科生と町田市立金井小学校の児童による共同作品の展示もしました。若さならではの発想による作品はとても

素晴らしく、展示室に星が落ちてきたようでした。

また、桜美林大学総合文化学群音楽専修生によるミュージアムコンサート「空間を音楽でデザインする」を開催し、延べ100名のお客様をお迎えしました。

夏休みに合わせて開催したプラネタリウムの投影や解体ショーは、子ども達に大人気でした。

来年度は、施設の老朽化に伴い、冬季以外は他施設に出向き「出前博物館」と称して、展覧会を企画しております。

老朽化対処と変則的な運営を成功させるために、来年度以降、館員は一丸となって、様々な困難を乗り越えていくつもりです。



企画展示 ポスター

## 日食と世界天文年イベント

八王子市こども科学館（サイエンスドーム八王子） 森 融

7月22日には国内で46年ぶりの皆既日食、東京では夏休みも始まり、子どもたちが観察するのに絶好の時間帯の部分日食であるため、ここへ照準を合わせ、事前に3回の日食学習会、当日には皆既日食中継と部分日食の観察会を計画しました。

6月21日、1回目の学習会。プラネタリウムの255席が満席となり、立ち見も出て大盛況となりました。内容は日食の原理、ピンホール、気温などさまざまな観察の方法、観察時の注意事項、写真やビデオ撮影について、皆既日食時の空の暗さの再現や惑星恒星の位置など、プラネタリウムや映像、パワーポイントを使って、筆者の3回の皆既日食経験を交え、お話ししました。

7月5日、2回目の学習会。満席の上、約90名が入れずに、急きょ2階のオリエンテーションコーナーで追加の学習会をおこないました。プラネタリウムは次の番組投影があるため、場所を変えなければならず、パワーポイントのみの解説でしたが、皆既日食を見に行くという方も数人いらっしや、質問も多く出て、関心の高さがうかがえます。



日食学習会3日目の7月19日の開館時  
約70人が朝早くから並んでいただきました

7月の2週目になってくると、電話の問い合わせが多くなってきます。一番多いのが「日食メガネはどこで売っているか?」「科学館で買えるか?」です。

日食学習会についての問い合わせも多く、3回目の学習会は、さらに多くの方の来館が予想されたため、予定の3時40分からの前に1回、さらにプラネタリウムに入りきらなければ、もう1回行くこととしました。

7月19日、3回目の当日。午後3時40分からの学習会に開館前から列ができ、10時の開館時には70人ほどになりました。各回毎の整理券を用意し、順調に配付して、列がなくなってひと段落した頃、電話を取ったM君が叫びました。「大変です!フジテレビのめざましテレビから電話です!」代わると「日食の観察方法を、

今日、実際に太陽を見ながら撮影したい。」ということでした。話を聞くと、学習会の合間に撮影できるような内容ではなく、「今日は学習会があるので対応できません。」と、残念ながらお断りしました。

1時30分、前倒しの学習会がスタート。プラネタリウムでの2回目も予想通り満席、さらに追加が決定。この日筆者は約5時間連続で6時30分すぎまで解説をし続けることになりました。この日の3回で366の方が学習会に参加し、3日間、計6回の学習会で953人が参加していただきました。

学習会が終わり「いよいよ皆既日食中継と日食観察会の本番だ。」と気合を入れた翌20日は海の日で、夏休み天文講座を開催し、多くの来館者がありました。そんなところに再度めざましテレビから電話があり、その日に撮影することになりました。ところが3日前の17日から天気が悪く、この日も日照がほとんど無い状態で、午後2時30分にスタッフが到着するも曇り空。太陽がチラッと顔を出しても、カメラを向けている間に曇ってしまう状態。時々太陽が出るのを待ちながら、「いけない観察の方法」などを撮影し、午後5時すぎから解説の撮影。あれやこれやで午後8時までかかりました。この内容は翌21日朝に放送され、早速テレビを見た観察方法を問い合わせる方もいました。

この日も曇。戻り梅雨の天気図。明日の日食当日も同じような天気と予測されました。

朝から電話の問い合わせがものすごく、この天気でも明日、日食が見えるか、日食観察会や皆既日食中継の内容、何時から並べば入館できるか、日食メガネがあったら曇りでも太陽が見えるか、さまざまな内容に対してお答えすると同時に、NHKが皆既日食の生中継をするので、家でテレビを見れば絶対に見られますよとお話ししました。電話はやっと12時30分すぎになって止まりました。

閉館後、中継のインターネットの回線を、事務室から正面玄関の天井を通してプラネタリウムのコンソールへ延長し、コンピュータを持ち込む準備を行いました。

中継は、配信を申し込んでいた小金井市の情報通信研究機構(NICT)から、16日にユーザーIDとパスワードが来ており、当日繋がるのを待つのみとなっています。

いよいよ22日、朝から小雨。しかし8時すぎから来館者が並び始めました。雨は止むものの、部分日食は期待できません。しかし列はどんどん延び、プラネタリウムの座席数を超えそうなので、急きょ人数を数え、定員のところに職員が「皆既日食中継はここで終了」の看板を持って立ちます。そうしているうちに人の列は正面玄関前からあふれて東の国道16号方面へ延び、車も16号から列になり、館長以下、職員6名が出っぱなし



で駐車場や付近の道路の整理に当たっています。筆者もメガホンで「皆既日食中継は満席、駐車場は満車で。」と16号まで叫んで回ります。本庁の生涯学習スポーツ部からも応援が3名到着し、整理に加わりました。

その間にも、筆者は朝一番でコンソールにセットしたインターネットのコンピュータを接続して、9時15分奄美大島からの映像を確認。9時40分硫黄島からの映像も確認。9時50分プラネタリウム内の準備ができ開場。

10時25分説明スタート、1999年ドイツでの皆既日食の映像を見て予習します。日食の原理等も解説していると、あっという間に奄美大島の皆既の時間に近づいてきます。しかし10時55分の皆既日食は暗い画面のまま、音声も聞こえず、他のインターネット中継のサイトに切り換えても全く繋がらず、あせっているうちに皆既の2分間が過ぎていってしまいました。この間、解説をしていたのですが、何をお話したのか、全く記憶がありません。一方、硫黄島からの映像は欠けた太陽が映し出されており、期待を持たせてくれます。



皆既日食中継は、この時点で満席 22日9時19分  
(来館者と車の整理で走り回っていた職員からヒンシュクをかった屋上からの写真)

この後20分の休憩とし、筆者は正面玄関前に出てみると、玄関前から駐車場まで人が一杯で、何と雲を通して太陽が見え、歓声が上がっていました。そこでコンソールに戻り、太陽が見えること、11時20分には戻ってほしいことを伝え、全員が正面玄関前に出て、部分日食も見ることができました。

11時20分すぎ、玄関前で中継の方はプラネタリウムに戻るよう促してコンソールに戻ると、ほとんどの方がすでに戻っており、スムーズな移動に驚かされました。

硫黄島からの中継は、細くなっている太陽のアップの映像だけが映り、音声は、誰だかわからない人物が「空が暗くなって、何か変な感じだね〜。」と世間話的な感想をずっと話しているのが聞こえ（人物の映像は無く）ドーム内が笑いに。太陽は刻々と細くなってゆき、音声

は途中から急にまじめなレポートになり、第2接触を迎え、皆既となりました。的確なレポートで、現地と一緒に皆既日食を見ているような臨場感がありました。皆既が終わる第3接触のダイヤモンドリング時には思わず拍手が起り、感動を共有することができました。

後でわかったことは、世間話はテレビ放送の本番前の話、まじめになったところからが本番だったようです。硫黄島の皆既の後、全員正面玄関前で部分日食を観察し、短い晴れ間に見える、戻っていく太陽の連続スケッチをとる小学生の姿もありました。



太陽が雲を通して見えた瞬間  
部分日食の最大に近い 22日11時9分

この時、ピーク時には、約1,000人が来館されていたと思われます。

翌日、読売、朝日、東京の各新聞の朝刊に当館の日食観察会の様子が写真入りの記事となり、一連の日食の行事は終了しました。その後には、日食学習会に来られていた小学校の先生から「学校で、みんなで日食を見ました。」とうれしいメールもいただきました。

曇り空なのに予想できなかったくらいの方々が来館され、これが快晴で暑かったらどうなただろうかと恐ろしくもなりました。

夏休みにはその後、特別天文講演会として、すばる望遠鏡がある国立天文台ハワイ観測所から布施哲治さんを招いて「太陽系の惑星たち、そしてもっと遠い銀河へ」を、9月には銀河鉄道の夜の朗読会「銀河鉄道の夜に描かれた宇宙」を開催し、プラネタリウムで宮沢賢治が見たであろう原作の星空を再現しました。

22年3月には、プラネタリウム番組「はやぶさ」が上映中であることにあわせて、はやぶさの電源系を担当されたJAXAの曾根理嗣さんによる講演会「帰ってくる小惑星探査機はやぶさ」を開催しました。

これらにより、21年度一年間の総入館者数は、プラネタリウムリニューアルの年であった20年度の約62,300人を超え、開館以来最高の約73,100人と、職員の日頃の努力に天の佑けが加わり、最高の一年となりました。

## 歴史民俗資料館における自然系事業の取り組み

武蔵村山市立歴史民俗資料館 石川悦子

昨年は、周知のとおり世界天文年であり、ガリレオの天体望遠鏡観測 400 年という佳節を迎えるにあたって、当館でも夏休み子ども展示「星座と伝説」(会期 7 月 25 日～ 8 月 31 日)、子ども体験教室「星の動きを観察しよう」(8 月 8 日)が、平成 21 年度の事業内容に盛り込まれていました。

当館は、狭山丘陵を背景に立地しているため、自然系資料の展示にも力を入れなくてはならないのですが、その配分は微々たるものです。そこに、天体に関する資料の展示となると収蔵資料を含めほとんどありません。

それを救ってくれたのが、7 月 22 日の皆既日食でした。東京での日食は約 2/3 程度でも、その変化を記録し、展示ができればと思惑を巡らせていたのに、生憎の天候で雲の切れ間から辛うじて観た天体ショーは呆気ないものでした。それでも企画展の中に盛り込んだことで、小学生の夏休みの課題には役立ったようです。

子ども体験教室は、西多摩地域を中心に天体観測の教育・普及活動に携わっておられる高橋芳弘氏を講師に迎え、3 台の大型望遠鏡を設置し、夕方から観察会を行うという初めての試みでした。世界天文年関連事業としての登録を行い、期待に胸を膨らませた観察会となりました。しかし、これもまた天候に阻まれ、1 回順延・再度

開催した日も豪雨。それでも 30 名ほどが集まり、館内でプロジェクターを駆使して、巷で話題の内容や身近な月・太陽と地球の関係、夏の星座と天の川など内容豊富に語りかけてくださいました。天気に左右された夏のひと時でしたが、参加者の手応えを感じたので、平成 22 年度も継続して天体観察会を行うことになりました。

当館では、自然系事業として狭山丘陵周辺の自然観察会を毎年行っていますが、低年齢層の参加者は少なく関心は薄いようです。しかし、自然関係の展示資料は興味深いようで、必ず足を止めて観察していわれます。自然系の専門員が常駐しない当館では、市民の協力を得ながら、この地域の特色を生かした事業・企画展示を心がけていきたいと思えます。



子ども体験教室 平成 21 年 8 月 29 日 (土)

## 2009 年日食フィーバー

東大和市立郷土博物館 野崎洋子

2009 年の一番の天文の話題は、なんとと言っても、7 月 22 日の日食。日本の陸地で起こる皆既日食としては 46 年ぶりであり、全国的に部分日食がみられるということで、連日、マスコミでも取り上げられていました。当館でもみなさんに関心を持ってもらおうと、半年以上前から準備をしていました。

プラネタリウムでは、より多くの方に見ただけのように、期日限定の特別番組ではなく、夏番組として 3 か月間投影することにしました。通常の番組は、制作プロダクションから購入することが多いのですが、実際に見たことがない方にも、日食を知ってほしいという担当者のこだわりから、各方面をお願いして、他のプラネタリウムでは投影されていないリアルな日食画像を手に入れることができたので、今回は当館自主制作で、リアルな皆既日食を紹介する番組を投影することにしました。日食はいつでもどこでもみられる現象ではなく、特に、皆既日食は見た目のとおりに画像にするのが難しい天文現象なのです。日食当日以降は、日食がみられてもみられなくても、観察結果を番組に反映して紹介していきました。観覧者の評判も上々でした。

日食画像提供者のひとりである塩田和生氏(画像のひ

とつは下記に掲載)を講師として講演会も開催することができました。このほか、皆既日食写真の展示や館内配布の星だよりに、日食の話題を月変わりで掲載、学習投影での解説のほか、学校へも出張授業をしました。

これだけ準備をして迎えた日食当日ですが、太陽は厚い雲に覆われていました。それでも、観察会を実施して、晴れ待ちをしたところ、薄くなった雲越しに部分日食を見ることができました。自宅や学校でも、「みえましたよ」などと声を聞くことができました。世界天文年のメインイベントのひとつとして、十分に盛り上ったのではないかと思います。





## ◆会員館活動報告◆

### 新たな試み・八国山たいけんの里の活動

東村山ふるさと歴史館 八国山たいけんの里 石川正行

東村山ふるさと歴史館では、平成21年5月2日に、分館として「八国山たいけんの里」を開園いたしました。この施設は、平成11年に焼失した旧武藤家住宅主屋のあった「かやぶき民家園」の跡地に建設されました。

館の周辺は、花菖蒲で有名な「北山公園」や、トトロの森として親しまれている「八国山緑地」、国宝建造物である「正福寺地蔵堂」、日本の歴史公園100選に選ばれている「下宅部遺跡はっけんのもり」など、自然や文化財に囲まれています。こうした立地条件から、たいけんの里の基本コンセプトは「八国山の自然と人とのカンケイ」。八国山周辺の自然とふれあい、遺跡から出土した遺物に基づく人の技術や知恵に学び、また今まで古民家で実施してきた伝統的な行事も盛り込み、季節や風土を感じる場所となることを目指しています。そして、「体験」を通じ、周辺の地域資源を結びつける情報発信の場として、また散策や観光の拠点として、「東村山の魅力の再発見・新発見」につながるきっかけを提供しています。

具体的には毎月のテーマに沿った体験事業を実施しています。体験事業には、だれでも気軽に参加でき、平日・休日問わず実施している「ちょこっと体験」と、主に休

日に行われ、事前の申込みを必要とする「ほんかく体験」があります。平成21年度には、ちょこっと体験として弓矢体験やドングリトトロづくり、昆虫切り紙・おりがみ、葉っぱのスタンプなどを、また、ほんかく体験ではネイチャーゲームやお月見会、縄文バレンタイン、草サイフづくり、草木染めなど、様々な事業を実施しました。さらに、たいけんの里では「はっちこっくメイト」と呼ばれるサポートボランティアの方々が活動しています。このボランティアは登録制で、「自然」「考古（下宅部遺跡を育てる会）」「アート&クラフト」「伝統文化」「広報・記録」「ガイド」の6つの部会があります。関心のある部会に所属し、たいけんの里を利用したサークル的な定期活動を実施し、ほんかく体験やガイドにむけてのスキルアップを行います。またたいけんの里の事業にサポートとしてのボランティア活動も実施し、日頃の活動の成果を発揮していただいております。

たいけんの里は開館以来、3月までに約3万4千人の方が訪れ、昨年は三博協の研修でもご利用いただきました。今後も多くの方にご利用いただくとともに、教育普及の要としての展開も期待されています。

### 平成21年度の活動報告

八王子市郷土資料館 紺野英二

八王子市郷土資料館では、年2回の特別展の他に、市民の方々から寄贈された資料を展示した「新収蔵コーナー」（通年）やコーナー展「故郷から戦地へ」（7、8月）を実施しました。また、火起こしと土器作りをする「原始古代の生活体験」講座（7月）や、講座「メカイを作ってみよう」（2月）を行いました。このなかから、主な事業を紹介します。

10月6日から11月29日まで、特別展「多摩の古墳」を開催しました。特別展では、八王子市内の古墳と横穴墓の資料だけでなく、多摩地区の各市などの資料から、できるだけ多くの遺物と写真を展示しました。古墳出土の遺物と写真、計170点から多摩地区の古墳と古墳時代を概観し、多摩地区の古墳を紹介しました。また、展示図録は、読み応えのあるものを目指し、多摩地区の古墳を紹介する以外に、多摩地区に関連する古代史研究の現状なども記載しました。会期中の入館者数は、延べ5613人にのぼり、展示図録（A5版、74頁）も安価（定価300円）なこともあり、非常に多くの来館者にお求めいただきました（展示図録は、現在でも販売しています）。また、計2回の展示解説では、計54名の参加が

ありました。参加者のなかには、展示会の情報は、インターネットで知ったという見学者が多数みられ、広報手段としてのインターネットの重要性を感じました。今回の特別展で多摩地区の考古学に興味をもつ方がたくさんいることが分かりました。

本館では、ガイドボランティアが有志でさまざまな活動を行っています。このボランティア有志の活動のひとつに紙芝居の作成と実演があります。紙芝居は、松姫（武田信玄の娘）を主人公にしたものです。郷土資料館で行った実演会には、2月までに122人、外部からの依頼による館外への出前の実演会には、280名（全12回）の参加がありました。また今年度は、東京文化財ウィークの期間中にこの紙芝居を郷土資料館で実演し、徒歩で松姫開基の信松院を拝観する事業を行いました（11月7日土曜日実施）。新たに行ったこの事業は、好評のうちに終了しました。

八王子市郷土資料館では、今後も展示以外にもさまざまな事業を行っていきます。また、多摩と八王子の歴史と民俗をテーマとした特別展示も行っています。

## 企画展「火の用心—江戸時代の火事と対策—」における成果について

府中市郷土の森博物館 花木知子

家屋が密集している宿場では、しばしば大規模な火災が起っています。府中宿も例外ではなく、江戸時代に数度の大火を経験しました。これらの府中宿における火事と防火、及び火伏せを紹介し、火災の増加する季節の前に防火について考えてもらうことを目的に、9月19日から11月23日まで企画展「火の用心—江戸時代の火事と対策—」を開催しました。

江戸時代に行われていた、火元とその風下の家を破壊して延焼を防ぐ「破壊消防」は、的確で迅速な作業が必要でした。このため宿場等の町場では、江戸市中と同様に火消を抱えていた場所がありました。

これまで府中宿の火消について述べられたものはほとんどなく、村人総出で消火にあたる「駆付消防」を行っていたと考えられていました。しかし、本企画展の調査において、府中三町の1つである新宿の資料から、府中宿にも火消が置かれていたことが明らかになりました。

彼らは「宿鳶」「火掛り」とも呼ばれる者たちで、万延2年（1861）の資料には15名の名前と役割が記されています。この役割の中に火消組の目印である纏や提灯があることから、宿内の火消組織は1つではなかった

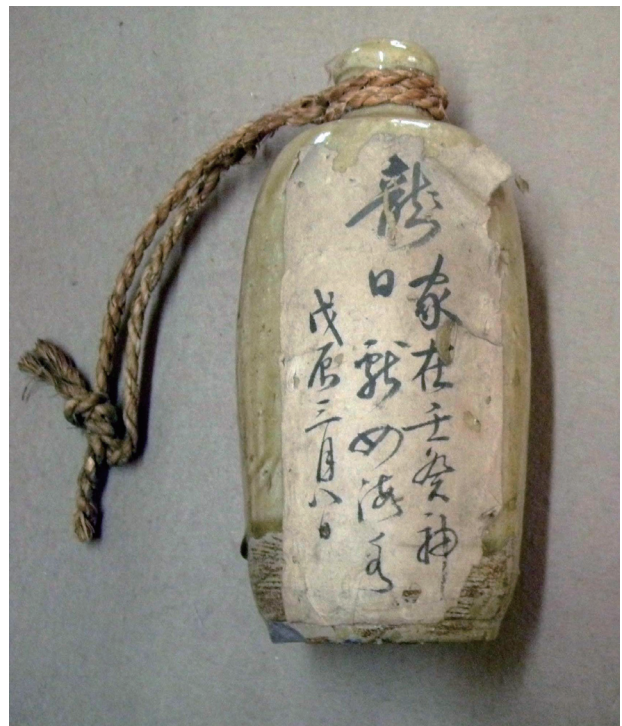
ことが推測できます。新宿では、この火消への指示が区々にならないように、中心的な村人17名を「火掛り世話役」に決め、統一的な運営を図りました。

この企画展において、江戸時代末期の府中宿における火消の姿と、その組織について僅かながら明らかになってきました。未だ断片的な内容ではありますが、府中宿で火消が組織されていたという事実が判明したことは、大きな成果です。

一方で、府中宿における火消の雇用形態や位置づけ、明治期の消防組織への推移について等、不明な点は多くあります。今後史料発掘や調査研究を通して更なる解明を試み、その成果をまた新たな展示会に還元したいと考えています。



展示風景



火伏のまじないが記された徳利



## 重要文化財「旧宮崎家住宅」屋根葺き替え等工事

青梅市郷土博物館 川島直之

「旧宮崎家住宅」はもともと北小曾木村（現在の青梅市成木）にあり、昭和52年に当時の所有者である宮崎義雄氏より青梅市に寄贈されたことに伴い昭和54年に青梅市駒木町の郷土博物館隣接地へ移築されました。建築様式からみて19世紀初頭のものであろうと考えられています。

昭和53年に国の重要文化財に指定されています。

現在地へ移築して以後、大規模な修理工事は行われていなかったため、屋根茅葺・礎石を始めとして腐朽・劣化が著しく、何らかの対策が急がれる状態でした。

工事は平成21年4月1日から6月30日の工期で行われました。

屋根は旧葺材を解体した後、軒付とともに茅葺を全面的に葺き替えました。茅と杉皮を交互に混ぜて葺く「マゼブキ」と呼ばれる手法で葺かれ、この「マゼブキ」は

葺かれた時にきれいな縞模様ができることから「トラブキ」とも呼ばれ、奥多摩や青梅などの山村の民家に特有のもので、茅は山梨県および宮城県から、杉皮は三重県より取り寄せました。

礎石・狭間石については一部沈下を生じていたことから、石を一旦掘り起こし石の据え直しを行い、その他、軒下土間の叩き直し、でい床組の補強、大戸脇の風呂溜桶の新調等を実施しました。

こうして、約30年ぶりの工事に伴い装い新たに生まれ変わりました。

「旧宮崎家住宅」は青梅の古民家を知るうえで貴重な文化遺産であり、今後も永く後世に伝えていくよう努力していきます。

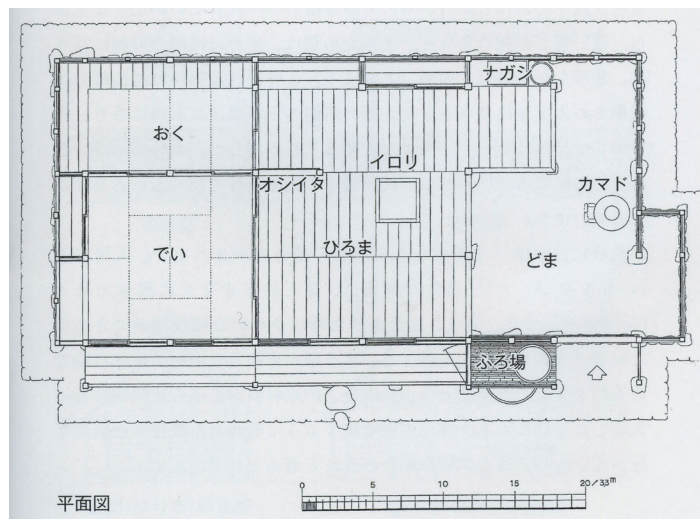
ぜひ「旧宮崎家住宅」に足をお運びください。



工事前の「旧宮崎家住宅」



工事後の「旧宮崎家住宅」



平面図

## 開館35年特別企画「深大寺展」の開催 ～国の重要文化財「金銅釈迦如来倚像」出現100年を迎えて～

調布市郷土博物館 長瀬 衛

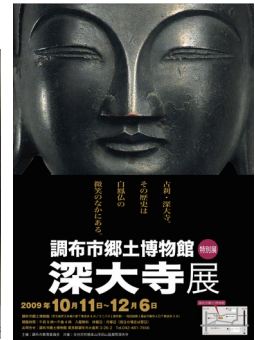
調布市域の歴史を考える上で、深大寺とその周辺はとりわけ重要な地域である。特に古代から中世については、同地域が焦点となっており、そして、その中心となっているのが深大寺である。また、深大寺といえば国の重要文化財である金銅釈迦如来倚像が「白鳳仏」として全国的に知られて、関東地方では最古の白鳳時代の仏像とされている。しかし、この仏像の存在があきらかにあったのは、明治42年のことで、当時、東京大学助手であった柴田常恵によって大師堂の須弥壇から発見されたものである。今年はちょうど100年目を迎えた記念すべき年に当たり、調布市郷土博物館と宗教法人深大寺の共催事業として、特別企画「深大寺展」を、開館35周年を迎えた郷土博物館で開催した。この展示会では、一般には公開されることのない深大寺所蔵の彫刻、絵画、工芸、古文書を展示するとともに、深大寺の縁起をはじめ、古代から近世の所蔵資料を紹介した。金銅釈迦如来倚像は複製品の展示となったが、側面や背面を写真パネルで紹介し、また、深大寺縁起絵巻についても巻頭から巻末までその内容を解説した。

また、関連事業として「白鳳仏の謎を探る」と題して、駒澤大学の村松哲文氏による講演会を文化会館たづくりで開催し、白鳳仏の特徴やその伝来をめぐる謎と深大寺の歴史的な背景についての興味深い講演をおこなった。

今回の展示会では、普段観る機会が少ない深大寺の文化財やその関連資料を出品することで、深大寺をより広く紹介することができ、その重要性や深大寺地区の魅力を深めることができ、多くの方に好評を博した展示会となった。



展示風景



展示ポスター

## 瑞穂町の自然環境の現状 一企画展「瑞穂町内で交通事故死した動物たち」を通して一

瑞穂町郷土資料館 高田賢治

瑞穂町郷土資料館では、平成21年度秋期に企画展「瑞穂町内で交通事故死した動物たち」を開催いたしました。

この企画展は、瑞穂町内の自然保護団体である「瑞穂自然科学同好会」の、結成から30年以上にわたる町内の動植物の生息状況の観察記録をもとに、特に交通事故死した動物に焦点をあてて製作いたしました。

町の白地図に、動物の交通事故が報告された地点を種類ごとに記して集計したところ、狭山丘陵及び平地林内を南北に縦断する道路沿いに、交通事故が集中していることが明らかとなりました。その割合は全体の72%にも及びます。最も多く確認されたのはホンダタヌキで約80%、このほかホンダキツネやオオコノハズクなど、狭山池岸のヒキガエルなどのほか、近年狭山池及び残堀川に見られるようになったカワセミなども事故死が確認されています。

集計結果からは、やはり森林は自然の宝庫であるということを示唆させます。本来これらの丘陵林や平地林は、小さな野道こそありましたが、自動車通行道路等で分断されていませんでした。人間が居住範囲を拡大していた結果、利便を求め自動車道路が造られ、動物たちの生息環境は分断されたのでした。その結果、動物たちは道を

挟んだ隣の森林に移動しようとして、悲劇が繰り返されるようになったのです。

平成21年度に瑞穂町で実施した町民意識調査では、瑞穂町に住みたい理由として最も多かった回答が「豊かな自然」でした。近年瑞穂町は都市開発が進み、以前より自然も減少しています。しかし、こうした町民意識調査の結果をうけ、郷土資料館も残された郷土の自然を大切に、後世に伝えるべく努力していきたいと考えています。



上段：展示風景

下段：ホンダタヌキの剥製



## 活動報告

奥多摩 水と緑のふれあい館 堀口行雄

奥多摩水と緑のふれあい館は、旧奥多摩郷土資料館跡地に東京都水道局と奥多摩町が共同で建設、新館になり11年目を迎え、お客様に気持ちよくご来館いただけますよう気持ちを新たにすることを心がけました。

観光地の中心ということや、周囲を豊かな自然に囲まれ、四季折々の変化が目の当たりに楽しめる場所でもあることから毎年多くの方にご来館いただいておりますが、近年の不況の影響等から入館者数は減少傾向にあり、都水道局やJR東日本等、団体との共同・協力事業の実施により入館者の確保に力を注いで参りました。

また開館以来、懸案事項となっていた収蔵庫については、当館に近い場所に民家を買上げ改修し、展示・収蔵が可能な施設として「青目立不動尊」を昨年度開設することができました。

今後も自然の博物館も併せ持った施設として奥多摩湖を訪れる多くの方々に楽しんでいただけるよう管理運営を心がけていきたいと考えております。

以下は21年度に実施した主なイベントです。

- 5月・春のミニコンサート（2日間延べ4回公演）  
内容：ソプラノ歌手の共演
- 6月・水道週間（7日間）  
花鉢配布（都水道局と共同）

- 7月・スタンプラリー（～10月）
- 9月・ヘブンアーティスト公演（午前午後の2回公演）  
内容：パントマイム等
- 9月・水源地郷土芸能公演  
内容：小河内の郷土芸能（獅子舞及び鹿島踊り）
- 11月・秋のミニコンサート（2日間延べ4回公演）  
内容：都民交響楽団の演奏
- この他 春・秋にJR東日本「駅からハイキング」に協力、当館をゴールに設定  
※22年度についても春・秋のミニコンサートや郷土芸能の公演等を予定しています。



ソプラノ歌手の共演

## 福生市史普及版「福生市歴史物語」英語翻訳事業

福生市郷土資料室 菱山栄三郎

今年度は国や東京都の補助金制度による緊急雇用創出事業が各種推進されました。これをうけて福生市教育委員会社会教育課文化財係（福生市郷土資料室）においても、3事業にわたる委託事業をおこないました。福生市史編さん過程で収集した古文書を撮影したマイクロフィルムを一部データ化する事業、昭和50年代に収集した民具の採寸、写真撮影等の民具資料再整理事業、そして福生市史普及版『福生市歴史物語』英語翻訳事業の3事業です。ここでは本年度の特色ある事業として福生市史普及版『福生市歴史物語』英語翻訳事業を紹介します。

『福生市史』は平成5年に上巻（112頁）が、平成6年に下巻（983頁）が刊行されその編纂をおえました。しかしながら市史の内容は専門性が高く、一般の市民の方々には少し難解であったことも事実でした。そこで、もう少し解りやすい福生の歴史を紹介する市史普及版の刊行が求められたのです。こうして平成11年に出来上がったのが『福生市史普及版 福生市歴史物語』でした。フルカラーで約200頁のこの本は、福生の歴史を45項目にわけ、全頁にカラー写真もしくはカラー図版を掲載し、内容的にも視覚的にも福生の歴史が理解しやすい構成でした。

そして『福生市歴史物語』が刊行されてから10年が経ち、また福生市では中学生を対象とした青少年海外派遣事業を毎年行なっていることから、『福生市歴史物語』の英語翻訳の計画が持ち上がり、今年度緊急雇用創出事業として実施されました。翻訳の中心となったのは、事業の性格によりハローワーク等で応募された方々でしたが、地名や人名などの固有名詞は、最終的には文化財係でチェックを行ないました。これまで漢字に隠れていた固有名詞の読み方を確定するのは困難な作業でしたが、かなり完成度の高い、そして資料的価値の高い書籍となったと感じております。書籍名は『THE HISTORY OF FUSSA』に決定いたしました。

今後は市内の図書館や中学校、関係部署に配置し、また関係機関に送付していく予定です。この『THE HISTORY OF FUSSA』が、地域の中学生の英語教育と郷土誌の学習、また中学生の海外派遣事業における文化交流のツールとして多くの方々に活用されることを望んでいます。

# 「昔の暮らし」をどう伝えるか

羽村市郷土博物館 河村康博

小学校3年次の社会科「昔の暮らし」の学習は、博物館施設と学校が連携して事業展開を行う機会として、多くの施設で積極的な活用が図られていると思います。当館においても、企画展「むかしの暮らし」を開催し、市内全小学校の見学を受け入れています。

この企画展について、昨年度までは物の説明に終始していなかったか、という反省があり、今年度はこれまでとはすこし違う工夫を盛り込んでみることにしました。「昔の暮らし」学習においては、「昔の暮らしぶりを知ること」が来館の直接的な目的である、と考えられます。ところが、暮らしぶりは無形の事柄ですので、時間を隔てた過去のことについては、直に伝えることができません。そのため、有形の物である生活用具等をよりどころに、類推を通じて擬似的な実感を持ってもらうこととなりますが、生活環境や居住環境があまりにも変わってしまっている場合、この「類推」がどこまでできるのか、という点について、小学校3年生の知識量・レベルを考慮しておく必要がでてきます。

そこで今年度は、古民家のいろいろの脇にテレビを置い

てみることにしました。昭和30年代のテレビやミシン、氷式冷蔵庫など、昨年度までは本館内に展示していた生活用具を古民家に展示し、約50年前の暮らしの現場を再現するとともに、学芸員の説明も、3年生が実体験で知っているもの（テレビ）と知らないもの（いろいろ）の対比や、同じ機能を持つもの（いろいろとヒーター・レンジなど）を考えること、に重点をおくようにしました。

また、部屋の中の暗さ、臭い、寒さ、床の感触、建物内部の雰囲気など感覚的な部分にも触れ、現代の暮らしぶりとは比べることで類推を促すようにしました。

こちらの問いかけに対し、子供たちの反応は、「知ってる!」「知ってるけど見たことない!」「知らない!」と我先に声を上げるなど、集中力を切らすことなく、楽しみながら見学を進めることができたようです。

このような事業（展示）の場合、事業の目的と主対象となる人（来館者）を明確化し、その対象者に合わせた事業展開を行うことが効果的ではないか、という発想からの試みです。今後はさらに学校との連繫を密にし、効果の検証についても具体化したいと考えています。

きょうど ぶかしはれしゆうからん暮らし かくてん 郷土学習週間関連企画展





## 平成21年は清瀬村誕生120周年

清瀬市郷土博物館 柳澤 剛

「清瀬」という名前の村が誕生したのは明治22年(1889年)のことでした。それまでの上清戸、中清戸、下清戸、清戸下宿、中里、野塩の村々がこの年に合併し、現在の清瀬市域と同じ広さで産声をあげました。平成21年(2009年)は清瀬誕生から数えて120年にあたることから、今年度は120年を記念した企画展の実施と写真集の刊行を行ないました。

なお、両事業の実施にあたっては、清瀬村誕生120周年記念写真展実行委員会を組織し、当館職員以外の方々にご協力をいただいております。

### 企画展「清瀬村誕生120周年記念写真展」

平成21年10月3日(土)から18日(日)まで、企画展「清瀬村誕生120周年記念写真展」を開催しました。

清瀬村誕生120年を記念して開催した企画展で、清瀬の明治・大正・昭和・平成にわたる写真を紹介しました。市民等から募集した清瀬の写真と、当館や市役所が保存していた写真等の中から約160点の写真を展示しました。

当館のギャラリーを会場とし、古い時代から新しい時代にかけて編年的に理解できるように写真を展示しました。また、航空写真を時代を追って並べたコーナーや、清瀬のできごとを記した年表や歴代首長(村長・町長・市長)の肖像写真を展示したコーナーを設けました。

会場には、若い方からご年配の方まで様々な年齢層の方々が来場されました。また、親子二世代、三世代で一緒に来館し、子どもや孫に説明をしている人などが印象的でした。そして、航空写真の前では自分の家を探しているのでしょうか、なかなかその場を離れない方までおり、来場された皆さまに喜ばれた展覧会だったと思います。会期中は延べ4,200人を超す来場者でした。

### 写真集「清瀬 村から町へ、そして市へ～120年のあゆみ～」

企画展で展示した写真を中心に編集作業を行い、約300点の写真を掲載した写真集を3月20日(土)に発売しました。1冊1,000円で好評発売中です。



会場の様子

## 写真集

### 清瀬 村から町へ、そして市へ ～120年のあゆみ～



写真集の表紙

## 中世武士立川氏関係史料集の刊行

立川市歴史民俗資料館 小川 始

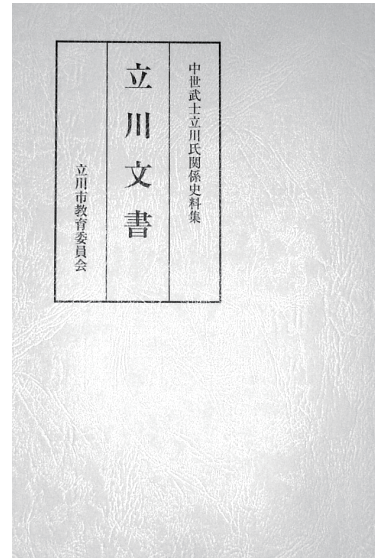
平成 22 年 3 月、立川市歴史民俗資料館は中世武士立川氏関係史料集『立川文書』を刊行いたしました。

中世立川氏は、いわゆる武蔵七党の西党日奉氏に属する武士で、平安時代末期ころから多くの同族らとともに多摩川中流域に所領を展開していました。市名と同じ立川を名乗る立川氏はまさに立川市ゆかりの武士です。近世初期に立川氏は水戸藩に仕官しており、立川市史編纂時の調査によって、水戸藩の地誌「水府志料」に中世立川氏に関する立川文書が収められていることは知られていました。

その立川文書の原本と目される史料が平成 12 年 4 月、立川市に寄贈されました。寄贈史料のなかには新発見となる古文書の写しや系図なども含まれており、歴史的にとっても価値の高い史料となりました。その間、関連史料の収集調査を進めてきましたが、成果をお知らせする機会がありませんでした。

しかし、平成 18 年 3 月、新たに発見された立川文書が立川市に寄託されると、史料集刊行の契機となり、最初に文書が寄贈されてから 10 年を経て、このたびの刊行となりました。立川氏の系譜や文書に登場する地名、

館跡などさらに研究を続けなければならない部分もありますが、とりあえずは一区切つけられたと思っています。なお、本書の刊行は多くの関係者のご協力なくしてはなし得ませんでした。改めて感謝の意を申し上げます。



A4 判・157 頁  
1 冊 1,800 円  
立川文書・系図・編年資料・解説の 4 部構成  
立川文書はすべてカラー写真にて掲載

## 名勝小金井（サクラ）の復活と当館の役割

小金井市文化財センター 伊藤富治夫

小金井桜の名で知られる玉川上水（小金井）堤のヤマザクラ並木は、江戸時代の武蔵野新田開発時代に新田地域の振興を目的に造成されたもので、江戸・東京の桜の名所として凡そ 270 年の歴史があり、大正 13 年（1924）には、国の名勝に指定され、現在に至っています。当館では、関係する歴史資料の収集とともに、名勝小金井（サクラ）が地域にもたらした歴史的意義を理解していただくよう、平成 6 年度から花見の季節に「小金井桜展」を続けてきました。

この間、平成 15 年 8 月に玉川上水が国の史跡に指定され、今や小金井（サクラ）の保護が一段とクローズアップされています。来年度からは山桜並木の再生・復活を目指して、東京都（水道局・教育庁）、地元小金井市、市民団体の協働により整備活用事業が始まります。玉川上水に架かる新小金井橋から関野橋までの約 650 m が整備モデル区間に指定され、繁茂した雑木の伐採と桜苗木の補植が行なわれ、数年後には新たな桜並木が復活することが期待されています。本事業は、著しく衰退した歴史的景観を再生するとともに、市民と協働してまちづくりに生かす初めての実験的試みでもあります。

当館は、整備活用モデル区間のすぐ近くに位置することから、史跡玉川上水や名勝小金井（サクラ）の歴史を

学ぶビジターセンターとしての役割が期待されています。

昨年度末には、これまでに収集した資料をもとにして『小金井市史 資料編 小金井桜』（A 4 版 899 頁）を発行しました。これは小金井桜に関する江戸時代から戦前までの歴史資料（文書、紀行文、詩歌、論文、新聞記事等）674 点を収録し、解説を加えたものです。このように当館（生涯学習課）が行なっている歴史資料の収集、展示、出版活動が今後の名勝小金井（サクラ）の整備活用事業に生かされることになれば幸いです。



大正時代の小金井堤の花見風景



## 特別展示の開催を市民とともに

日野市郷土資料館 白川未来

当館では、特別展「七生丘陵の自然と暮らし」を平成21年10月3日～12月13日の会期で開催しました。日野市南部に横たわる丘陵の姿は、市民にとってお馴染みの風景です。この丘陵は多摩丘陵の一部であり、かつての七生村の範囲だったことから、日野市では「七生丘陵」と呼んでいます。その七生丘陵の特別展示にむけ平成20年度から、市民調査員の募集を行いました。市の広報に募集記事を掲載し、大勢が集まる行事ではチラシを手渡しました。その結果、今までの資料館ボランティアの参加者、七生丘陵に親しみを感じていた方、昆虫・野鳥・植物が趣味の方などの応募がありました。

「七生丘陵」というテーマには様々な要素が含まれます。時代は200万年から現在まで、分野は地質もあれば丘陵地の宅地開発といった歴史もありといった内容でした。

<特別展示の構成>①七生丘陵の地形と地質、②雑木林の植物と生き物、③七生のできごと、④丘陵の村々の暮らし、⑤体験コーナー、⑥かわりゆく七生丘陵、⑦出かけてみよう七生丘陵へ、⑧映像で見る丘陵のハイキングコース

18人の“七生丘陵調査団”メンバーは、自然班、歴史班、ハイキングコース班に分かれ、それぞれの興味や特技を生かしながら活動を行いました。植物・野鳥・昆虫の写真を撮影しDVD作品に編集したり、ハイキングコースを歩き道標や見所を地図に落とし込んだり、人口の変遷

について統計資料からグラフを作成するなど、展示物にもっていきける形にするまで、積極的に取り組みました。また、そのような活動を行う中で、各人の持つ知人のネットワークから、七生地域についての新たな情報を得ることもできました。

特別展示開催中には、七生丘陵調査団は展示解説を担当し、調査だけでなく人々に伝える役割まで果たすことで、地域との架け橋となりました。調査団の活躍ぶりには感謝の言葉もありません。郷土資料館が人々と繋がることの大切さを、この特別展示で、更に強く実感することができました。



多摩丘陵の地層を学ぶ調査団の学習会（長沼公園にて）

## 檜原村郷土資料館の22年度事業計画

檜原村郷土資料館 吉沢文夫

檜原村郷土資料館は圏央道の開通により「あきる野インター」より車で約40分と都心から近く、ドライブがてら来館するお客様とハイキングのお客様がほとんどですが、最近の傾向として埼玉県からの観光客が多くなりました。

当館では「自然と観光」「歴史と民俗」の二つをテーマに景観や動植物、遺跡発掘時の出土品及び民具や兜式入母屋造りと呼ばれる古民家の模型などが常設されています。

又、村の祭りを紹介するレーザーディスクやハイビジョン映像による「檜原村歳時記」の放映が常時可能となっております。

尚、22年度は下記のように計画いたしましたので、多数の来館をお待ちいたしております。

1. 資料館燻蒸（休館） 22.6.14～6.19まで
2. 夏休み昆虫標本展 22.7.18～8.30まで
3. 山野草標本展 22.10.1～10.31まで
4. まゆ玉飾り 23.1.8～1.20まで
5. 檜原村野鳥写真展 23.2.10～3.9まで
6. その他

○檜原村の自然を紹介する写真展を随時開催する。

○ハイビジョン映像による「檜原村歳時記」が好評であるため、広報及び村のホームページ等を利用して宣伝し来館者の増員を図る。

## 『展示を通じた「出会い」の場』

くにたち郷土文化館 高橋秀之

くにたち郷土文化館は、1994年11月に開館し、今年で15周年を迎えました。今年度の当館の活動紹介として、展示を通じた「出会い」の場を意識した二つの企画展を紹介いたします。

一つ目は、8月24日～9月14日に開催した「くにたち陶芸展 ～人間国宝からまちの陶芸家の土と炎と技の響宴～」です。当館では、陶芸用電気窯などの設備があり、これらの設備を利用して、陶芸グループが6団体ほど活動しています。その作品発表の場として、今まで4回「陶芸展」を開催していました。今回、新たな試みとして、市内の陶芸家や陶芸に関心のある方などにも声をかけ、さらに市内で活動されていた重要無形文化財保持者（人間国宝）の故三浦小平二氏の作品も展示する「くにたち」の陶芸展にしました。人間国宝・プロの陶芸家・まちの陶芸家（趣味として陶芸をされている方）の様々な作品に「出会える」展示になったと思います。

二つ目は、12月16日～27日に開催した、芸術支援プロジェクト「遙かな空展」です。この展示は、芸術家をめざす若手アーティストを支援するという趣旨のもと、参加希望者を募り、展示構成や期間中のイベントをアーティストと郷土文化館が一緒に考え行っていく企画展として開催いたしました。今回は、武蔵野美術大学・

東京造形大学・女子美術大学の学生・卒業生6名が参加しました。会期中は、アーティストが作品解説をしたり、来館者が各アーティストにメッセージを書いてもらうという企画を実施しました。また、展示室廊下にキャンバスを設置し、来館者に自由に絵を描いてもらう「きみもアーティスト」では、たくさんの方に参加していただきました。

これからも、当館の展示が、多くの方々の「出会い」の場となるよう、努めていきたいと思えます。



「遙かな空展」の参加アーティストたち

## 継続する事業

東大和市立郷土博物館 野崎洋子

### プラネタリウム改修工事

年度当初にプラネタリウムドームの改修工事が入りました。そのため、4月21日（火）～6月19日（金）の平日のプラネタリウムを休みにし、工事のない週末だけ、投影をすることにしました。

平日のプラネタリウムが休みになって、一番困るのは学校や幼稚園保育園といった団体向けの投影ができないことです。毎年この時期に利用しているの、今年もぜひ利用したいという団体が多いのです。特に、平成21年度は七夕のほかに、7月22日の日食に向けて、投影の依頼が多く寄せられていました。6月23日から平日の投影再開とすると、待ってましたとばかりに予定は埋まり、午前中は学校や幼稚園・保育園を対象とした団体向け投影、午後は一般向け投影と、プラネタリウムはフル稼働になりました。特に、学習投影は投影のラインナップのひとつとして、学校からも頼りにされて、なくてはならないものなんだと感じさせられました。

### 企画展示とロビー展示

当館では、春の展示が始まりました。企画展示室では、恒例の収蔵資料展を開催。収蔵資料展の今回のテーマは「まわす民具」、今回でシリーズ7回めになります。ミシ

ンやトウミ、脱穀機など、まわして使う民具が所狭しと展示されています。ロビーで展示している、『狭山丘陵で学んだよ』も今回で9回目。郷土博物館で行っている出張授業では、職員が学校へお邪魔したり、学校から狭山緑地や博物館に来てもらったりしています。学校がある平日は毎日のように行われています。とくに、環境学習で学んだことを紹介しているのがこの展示です。博物館はこうした継続する事業の積み重ねなのだと思います。



改修中のプラネタリウムドーム



# 「貝のせかい・多摩の貝」をふり返って

パルテノン多摩歴史ミュージアム 仙仁 径

平成21年11月20日（金）から平成22年3月15日（月）まで、企画展「貝のせかい・多摩の貝」を開催しました。「海のない多摩で貝の展示？」と思われる方も多いかもしれませんが、当館で貝の展示をおこなう理由は少なくとも2つあります。

1つは開館時に多摩市内在住の貝研究家、青木茂男氏から約730種の貝および海産生物標本が多摩市に寄贈され、以来当館で保管しているからです。「青木コレクション」は、青木氏が国内各地やフィリピンなど海外にまで赴き、幅広く貝類を収集されたもので、貝類の多様性を学ぶのに恰好のコレクションです。今回の展示に先立ち、青木氏にお話を伺うことができましたが、社会人になってから貝に興味を持ち、その頃に鉱物学者として著名な桜井欽一博士と偶然知り合い、貝の師として様々なことを教えてもらったことなどを生き生きと語られていました。展示を快諾して下さっただけではなく、貝と人のつながりを示す数々の資料を展示のために貸して下さいなど、今回の展示は青木氏の全面的な協力で助けられました。「自分の趣味で集めたものが、多くの人のお役に立てたのが嬉しい」と言われたことが印象的でした。

そのような青木コレクションですが、開館以来、コレ

クションをメインにした展示をおこなえずにいました。今回、展示をおこなうことにした2つめの理由は、調べると多摩市と貝は意外とつながりがある事がわかったからです。たとえば、多摩丘陵にはマメシジミという小型の二枚貝が分布しています。成長しても5mm程度と微小で、湧水の泥の中に生息しています。私は10数年前に多摩丘陵の工事現場でのマメシジミ保護作業についてのニュースを見てその存在を知りました。今回ぜひ紹介したいと考え、日野市郷土資料館の白川未来氏にマメシジミの研究家、丸山俊幸氏をご紹介いただきました。電話でお話したところ、なんとニュースになったマメシジミの保護を工事関係者に訴えたご本人でした。丸山氏のおかげで、マメシジミを採集することができ、また多くの方にその存在を知っていただく機会を提供することができました。

貝は思っていた以上に多くの人々を魅了するようで、多くの入場者に恵まれました。入場者の年齢層も幅広く、20代くらいの若者の姿も展示室で見られたのは想定外でした。今回展示した標本は青木コレクションのごく一部なので、今後も機会があればその他の標本を紹介したいと考えています。



貝類標本の展示



貝と人との結びつきを示す資料



マメシジミの生息地（町田市）

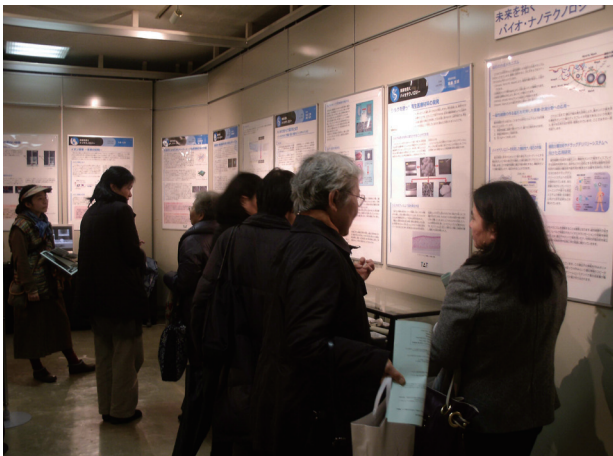
## 第70回 特別展 「未来へつながるテクノロジーの道」の開催

東京農工大学科学博物館 松島朝秀

東京農工大学科学博物館第70回特別展“未来へつながるテクノロジーの道”が、2010年2月27日（土）から3月10日（水）の日程で開催されました。今回の特別展は、本館の特別展として70回目の区切りとなることに加え、本館が工学部附属の繊維博物館から全学化され、「東京農工大学科学博物館」と名称も新たに再出発して最初の特別展となりました。第70回特別展実行委員会では、この記念となる特別展で、本学で行われている最先端の科学研究を一堂に展示することが相応しいのではないかと考えました。そこで、本特別展を昨年末に国立科学博物館にて開催されました「大学サイエンスフェスタ 上野の山に大学の先端研究が大集合」の帰属展として企画致しました。

本学が取り組んでいる最先端の研究を、子供から大人まで誰にでもわかりやすく説明し、誰もが科学への興味を刺激される内容を目指しました。

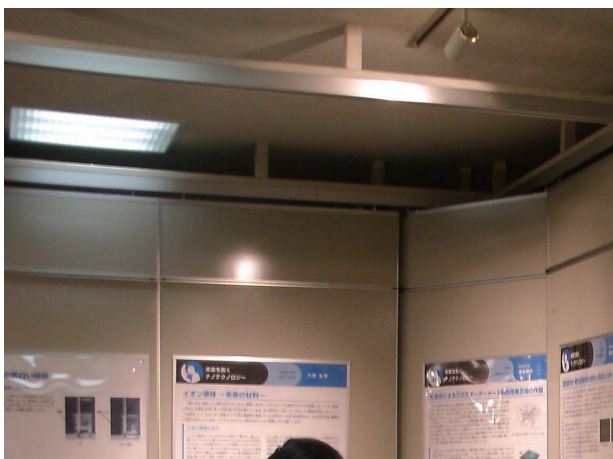
本学の前身である東京農林専門学校と東京繊維専門学校から現在に至るまで、農学、工学の教育研究活動は、本学において二つの大きな軸を形成しております。平成16年4月に国立大学が法人化され、大学も従来の教育と研究だけではなく、開かれた大学として社会への貢献が強く求められるようになりました。本博物館は、これまで以上に本学の最新の研究成果や、これまでの学術資料を保存・展示することによって、本学をより理解して頂く、知って頂くための博物館活動を今後も推進して参ります。



バイオ・テクノロジー分野の展示・解説



メカトロニクス分野の展示の様子



エコテクノロジー分野の展示・解説



インフォメーションテクノロジー分野の展示



## 動き出した移築復元工事

江戸東京たてももの園 高橋英久

平成22年3月から建造物の移築復元工事がついに動き出しました。園内の東ゾーン（下町ゾーン）に新たに2棟の建造物が復元されます。その2棟とは青梅市にあった万徳旅館と、港区にあった土井邸です。

久しく遊び場として親まれてきた空き地も、本来の目的である復元建造物の建設地となります。居心地が良かったこの空間がなくなってしまうのは園としてもとても寂しいことですが、新たな建造物の復元によって下町としての街並みが充実するはずで、景色もだいぶ変わるのではないのでしょうか。

万徳旅館は青梅市西分町に江戸時代末期に創建された2階建ての旅籠の形式を残す旅館で、都内に唯一残っていた旅籠建築とも言われています。青梅街道に面したこの旅館は、かつては、富山の薬売り等の行商人や御嶽講の参拝者等が多く利用していました。万徳旅館の復元は外観を創建当初の形に戻し、内部の情景再現を昭和20年代とする予定です。

土井邸は昭和3年（1928）に港区白金台に建てられた木造3階建ての商店建築です。この建物は2階のヴェランダを銅板を用いた洋風の意匠としながら、3階の屋根を伝統的な出桁造りにするなど、和洋折衷のユニークなデザインになっています。間口に対して軒高が非常に高い特異なプロポーションを持っており、復元が完成す

れば、周囲の建物を見下ろすような建物となるはずで、土井邸は昭和初期の鯉節や海苔などを扱う乾物商に復元する予定です。

工事は平成22年3月から始まり、平成23年夏ごろに建物の公開を予定しています。ざっと工程をお知らせしますと、春から夏にかけて基礎工事や木材の調査を行います。9月ごろからは組立です。クレーンなどを使って木材を組んでいきますので、この時期の工事が一番ダイナミックで見応えがあると思います。その後冬には壁や内部の造作工事、春に外構工事といった具合に進んでいく予定です。工事期間中は安全のため現場の周囲を囲みますが、囲いは、中の作業の様子を見ることができるよう一部透明に作っています。移築復元建造物の工事の様子を見る機会は希少です。工期は長いので、折に触れて見ていただくと楽しめると思います。



## 国立ハンセン病資料館の最近の活動について—企画展示を中心に—

国立ハンセン病資料館 西浦直子

昨年（2009年）は、日本で初めての公立のハンセン病療養所が開所してからちょうど100年の節目の年でした。当館ではこの機会に、「隔離の百年—公立療養所の誕生—」と銘打った企画展を、7月末から12月末までの約半年にわたって開催しました。東京・青森・大阪・香川・熊本における、公立療養所の設置をめぐる動きを追った展示でした。

ハンセン病（癩）の患者を収容する療養所をつくることになったとき（1907年、「明治四十年法律第十一号」）、その設置場所をめぐるさまざまな動きがありました。ごくおおざっぱに言えば、設置予定地が周辺住民の生活圏に近いのか遠いのかによって、設置への激しい拒否か、あるいは無関心か、といった反応が見られたのでした。東京・東村山市の国立療養所多磨全生園も最初の公立療養所の一つですが、流血事件にまで至る設置反対運動が起きました。「地域の発展を阻害する」「野菜が売れなくなる」…展示資料は多くが新聞記事や地域の議会議事録など文書資料でしたが、その中に、隔離されることになった、家を出て放浪しなければ生きてゆけなかった患者の苛酷な境遇をかえりみる声はありませんでし

た。遠くにいる間は放任するが、近く来ると差別をむき出しにする、そんな世相が見えてきたのです。

ふりかえって現在、各ハンセン病療養所では入所者の高齢化・少人数化が顕著です。それぞれ、地域の中で存続していくための方策を探っています。しかし地域にいる私たちの心の奥に、100年前に顕わにした「無関心と拒否」という考えが残っていれば、それもうまくゆくはずはありません。今回企画展で目指したのは、今の課題として私たち自身にハンセン病をめぐる差別と排除のありようを問いかけることでもありました。

今年に入ってからは、2月一杯の会期で「桃生小富士展」を開催しました。国立療養所東北新生園の入所者で、長く水彩画と川柳を制作してきた桃生（ものう）さんの、あざやかで温かい色彩の色紙とおだやかなユーモアにあふれた川柳を展示しました。

今年4月末からは「着物にみる療養所の暮らし」展を開催する予定です。療養所で着られたうどん縞の単衣や袴、着物にまつわる手仕事（仕立て、洗い、繕い）、それらをおして見る療養所の生活をご覧いただければと思います。

## モノからコトへ、コトからヒトへ

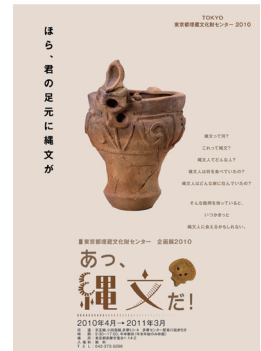
東京都埋蔵文化財センター 小葉一夫

2009年度の展示テーマは「多摩丘陵の縄文集落」。当センターでは多摩ニュータウン遺跡群の発掘調査によって出土した遺物を中心に展示していますが、中でも縄文時代の遺跡が最も多く、数多くの縄文土器などが出土しています。今回はその中から、京王線堀ノ内駅の北側に位置し、多摩ニュータウン遺跡群の縄文集落の中で最も規模が大きいNo.72遺跡の出土遺物を中心に展示を行いました。また、年間をとおして、多摩ニュータウン地域の旧石器時代から江戸時代までの歴史が概観できる展示も行っています。

展示のもう一つの柱は、縄文時代の体験コーナーです。縄文土器の立体パズル、火起こしの模擬体験、縄文人の主食であるドングリをつぶす体験、縄文ファッション体験など、楽しみながら縄文時代を体験することができる企画を用意しています。中でも今年度からは「火おこしマイスター」の認定制度をはじめました。平日随時の申込で、実際に火おこしの体験が無料ででき、成功した人にはマイスターの認定書を発行する制度で、これまでに100人以上の方が挑戦され、大変好評になっています。

年間行事としては、定番になっている縄文土器作りや勾玉作り、編布教室をはじめとし、さらにここ数年でようやく定着してきた縄文食体験や、今年度初めて実施した石の斧で木を切る体験など、参加型、体験型の事業をおこなっています。これまでの単に土器が出土しましたという“モノ”だけの展示から、それが実際の様子に利用されていたのかを体験によって理解してもらう“コト”の展示に、さらにそれが現代の生活あるいは現代の人間とどのように係っているのかを考えてもらう“ヒト”への展示へと発展させていければと考えています。

2010年度の展示では、それらを集約した形を縄文時代のフィルターをとおして展示をおこない、「あつ、縄文だ!」をテーマとしました。また、多くの方が気軽に参加体験できるよう、今年度より全ての事業を無料としました。



## 21年度活動報告

集合住宅歴史館 野原亜沙子

集合住宅歴史館は、UR都市機構 都市住宅技術研究所内にある施設の1つで、日本住宅公団時代に建設された団地の一部や、同潤会代官山アパートといった、歴史的に価値の高い集合住宅を移築・復元しています。

### 一般公開

集合住宅歴史館が設置されている（独）都市再生機構都市住宅技術研究所は、住宅に関する様々な技術開発や実験・研究の成果を専門家だけでなく一般の方にも公開するため、毎週火、水、木及び第2、4金曜日に研究施設の一般公開を行っています。研究所には、敷地内に研究と実験のための施設が10施設、さらに展示・体験のための公開施設が6施設あります。一般公開は事前予約制となっていますが、海外からの来場者も含め多くの方にご来場いただいております。平成21年度は、1882人（平成22年2月末時点）の来場者があり、海外からは14ヶ国、179人が訪れています。

### 特別公開

研究所では、毎年5月に予約無しでご見学いただける特別公開を行い、施設の公開とあわせて特別イベント等を開催しています。平成21年度は、5月22日（金）、23日（土）の2日間、「ルネッサンス【団地再生にむけて】」をテーマに、6箇所の一般公開施設に加えて振動実験棟、

風洞実験棟等の公開や、特徴のあるUR賃貸住宅をペーパークラフトで再現したり、太陽光発電によって動くバットの製作といった参加型のイベントなどを行いました。



ペーパークラフトの作品



作成風景



## 新規常設展示物「地球をめぐる水」

多摩六都科学館 玉井久雄

多摩六都科学館では、平成22年3月7日より地球上の「水の循環」をメインテーマとした新しい展示物を公開しました。この展示物の製作にあたっては企画段階から市民との協働作業の手法を取り入れ、落合川・黒目川の流域で長年に亘って水辺の環境保全に係るボランティア活動を続けている「東久留米・ホテルを呼び戻す会」より各種の資料提供と監修へのご協力をいただきました。

展示物の内容としては、多摩地域を流れる河川とその主な水源である地下水・湧き水との関連を中心に、地域に特有の水環境とそれを生み出す基盤となる武蔵野台地の地質や地形的な特徴についても同時に学ぶことができるような構成となっています。また、大型の地形模型を中心に展示物の各所に追加情報を掲示できるスペースを設けるなど、今後、環境教育や地域教育の素材としても発展的に活用できるよう配慮しています。

導入部分の「川パズルに挑戦!」のコーナーでは、川に沿ってパズルピースを組み上げることで楽しみながら地域を流れる川の存在について再認識し、「武蔵野台地

の水」のコーナーでは、武蔵野台地の地形を模式的に立体化した大型模型と多彩な地質断面図などにより、一般的には水に乏しいとされる洪積台地に多くの湧き水と河川が存在する理由を詳しく学ぶことができます。

また「落合川と南沢湧水群」のコーナーでは、都市化の進む東京の郊外に、環境省の「平成の名水百選」にも選ばれた豊富な湧き水が残されている様子を美しい映像と写真を用いて紹介するとともに、かつては汚れていた川を魚や鳥・昆虫など多様な生き物が棲息できる豊かな水辺へ再生させるために尽力してきた市民の方々の活動に関する情報公開コーナーを設置しています。



3月7日オープニング  
セレモニーを前に展示の  
説明を受ける参加者

## 『多摩のあゆみ』第136号、特集「近現代の多摩農業」の編集

たましん地域文化財団 坂田宏之

『多摩のあゆみ』第136号では、「近現代の多摩農業」を特集しました。

特集冒頭の本曾雅昭氏（東京都農林総合研究センター副所長）「明治期の農業 茶業および養蚕業—近代農業の夜明け—」で、自給的農業中心の農村であった多摩地域に、文化文政期以降に茶が、安政期以降に養蚕が盛んになり、明治期に重要な輸出品として生産が増えてゆく過程、それらが第二次大戦中の食糧増産、戦後の工業化・都市化で衰退してゆく過程などを概観しています。それをふまえ、特集全体で「ウド」や「のらぼう菜」「奥多摩ワサビ」といった多摩地域を代表する農産物を紹介、各地の農業の移り変わり、今後の展望をご考察いただきました。

グラビアでは「東京都農林総合研究センター（旧東京都農業試験場）所蔵の細密画」から8点をカラーで掲載しました。この野菜細密画は大正から昭和にかけて、同試験場で試験栽培していた作物や商業栽培されていた品種の絵画資料です。野菜のほか家畜、淡水魚に至るまで900点にのぼり、このうちの多くは大正後期から昭和前半に描かれました。第二次大戦の混乱や都市化の中で原種が失われ、この絵の中でしか品種の姿や色を確認できないものも少なくありません。多摩・東京の農と食を研究する上でも、貴重な資料といえます。

大都市江戸・東京の存在は、多摩地域の景観形成に大きな影響があります。また様々な伝統農産物の衰退には、第二次大戦中の米や麦を中心とした食料増産が関係しています。本特集中では大谷孟雄氏「聞き書き 秋留台地、檜原の農業」、高橋重雄氏「柳久保小麦」、川島隆之氏「多摩の植木生産の歴史」のなかに色濃く読みとることができます。

近年は、食と農に関する教育活動の重要性、また農にまつわる伝統文化などが再評価され、伝統作物の復活などが行われるようになってきています。本特集でも、大竹道茂氏「多摩の農業景観と地域文化、その保全と復活」で、都市農地を見直し、農をもっと身近にする動きとして「農の風景 フォトコンテスト」「都市農地の景観を評価するコンテスト」「江戸東京伝統野菜江説明版の設置」についてを紹介。また井原満明氏「多摩地区農業と市民の利用」では、多摩地域の農業の現状をふまえた上で、未来に向けて都市農地・山村荒廃地をどう保全・活用してゆくか。それに向けた、市民の耕作参加への可能性をご考察いただいています。

各時代の農業政策、国際的な農産物流通などに翻弄されつつ、かろうじて生き残る、都市近郊多摩の農業の姿。この特集を編集するなかで、それが痛切に感じられました。

## ◆新規入会館紹介◆

### 国立天文台天文機器資料館

国立天文台 中桐正夫

この度、三多摩公立博物館協会に新規入会手続きを進めさせていただいている国立天文台天文機器資料館（写真1）について紹介させていただきます。



写真1 天文機器資料館

国立天文台は日本の天文学の中枢機関として132年の歴史をえています。1878年に東京大学観象台として設置されたのを一応の起源にしていますが、国立天文台としての機能はもっと古いものです。徳川幕府の浅草天文台をも引き継いだという面もあり、天文学の性質上、国のような行政組織には必ず天文学を行う部署がありました。それは行政機能として必須であった「時と場所」を知る、あるいは定める、すなわち暦の編纂、時刻の決定、地図上の経緯度の決定が天文学の観測から決められるから、平安時代の朝廷にも天文官はいたのです。

さて、国立天文台の前身である東京天文台は、その名前がついたのは1888年で、東京大学天象台（東京大学観象台は1882年に天象台と气象台に分離された）、海軍省観象台、内務省地理局内観測課の3者が統合され発足しました。

このようにして東京天文台は東京大学の天文学研究所として発足したのですが、国立天文台としての暦の編纂、時刻の決定、経緯度の決定などの役所としての機能も持ったものでした。東京大学の天文学研究所でありますから、最先端の天文学研究へ努力が続けられ、発展してきましたが、そのことは古くなった観測・測定機械類、古い資料への配慮より、先端技術を用いた観測装置開発が最優先になり歴史的なものへの配慮が欠けるものでした。東京大学を出て国立天文台への改組転換は1988年でしたが、この改組転換も世界最高性能の大型光学赤外線望遠鏡「すばる」の建設を進めるためでした。

1995年頃、学術審議会学術情報資料分科会学術資料部会の中間報告に沿って、東京大学、京都大学などに博物館が設置され、国立天文台でも歴史的に貴重な観測装置など後世に残すべきものの調査が行われたことがありましたが、最先端の研究が優先され調査がなされただけ

に終わっていました。

2008年4月に国立天文台天文情報センターにアーカイブ室が設置され、国立天文台に残された歴史的に貴重な観測・測定機器、資料等の発掘、復元、展示を始めました。1880年ドイツ製のレプソルド子午儀を発掘、復元し、天文台に残っていた子午儀類を集め2008年に子午儀資料館を開設し、2009年には国立天文台の古い倉庫を漁り歴史的に貴重な観測・測定機器を収集し、天文台外へ散逸した望遠鏡などを収蔵して天文機器資料館を開設しました。

この度三多摩公立博物館協会に新規入会しようとしているのは、国立天文台としてではなく、この度開設した天文機器資料館であります。現在の国立天文台は三鷹市にありますが、関東大震災までは当時の麻布区飯倉の海軍省観象台があった地にあり、その地が狭隘であったことと、また都心の燈火を避けるため明治末期に三鷹の地に移転のための敷地を用意したのでありますが、明治37、38年の日露戦争による国の疲弊のため移転が進まず、その実現には大震災による麻布の天文台の壊滅的な破壊の機を待たねばなりません。関東大震災の被害を免れ、三鷹に移転した望遠鏡に、1880年ドイツ製のレプソルド子午儀、1903年フランス製のゴーチェ子午環などがありますが、ゴーチェ子午環は麻布の天文台が狭隘だったために展開することが出来ず、梱包されたままであったために、大震災による破壊を免れたといういわくつきの物であります。

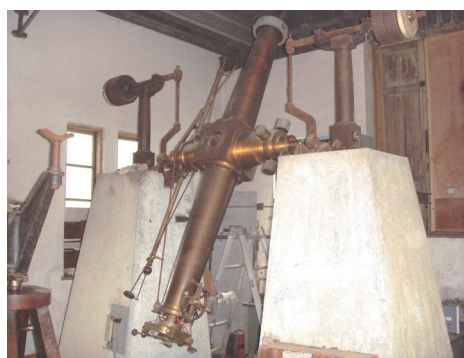


写真2 レプソルド子午儀

現在、国立天文台天文機器資料館には、100点を超える歴史的に貴重な望遠鏡の類、測定機の類、時計の類等が収蔵されています。

これらのうち何点かは、世界天文年2009の巡回展示、企画展示のために貸し出され、三多摩公立博物館の一つである調布市郷土博物館にも7点の収蔵品を貸し出しました。また長野県上田市の上田創造館の世界天文年2009の企画展示には20数点を貸し出すということも行いました。



東京都三多摩公立博物館協議会会報

ミュージアム多摩 No. 31

発行日 2010年3月31日

発行 東京都三多摩公立博物館協議会  
2009年度会長羽村市郷土博物館  
東京都羽村市羽 741

印刷 共同印刷所

編集委員 青梅市郷土博物館 鈴木章久  
調布市郷土博物館 平 自由  
八王子市こども科学館 森 融  
府中市郷土の森博物館 本間隆幸

# ◆東京都三多摩公立博物館協議会会員名簿◆

館名	住所	電話	交通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町 1-6-3	042-396-3800	西武新宿・国分寺線「東村山駅」西口下車徒歩 8 分
八王子市郷土資料館	八王子市上野町 33	042-622-8939	JR 八王子駅南口から徒歩 15 分・京王バス市民会館經由「西八王子駅」行、バス停「市民会館前」下車すぐ JR 中央線「八王子駅」北口・京王線「京王八王子駅」からバス「市民会館」下車徒歩 3 分
府中市郷土の森博物館	府中市南町 6-32	042-368-7921	京王線・JR 南武線「分倍河原駅」から郷土の森総合体育館行きバス「郷土の森正門前」下車
町田市立博物館	町田市本町田 3562	042-726-1531	小田急線 JR 横浜線「町田駅」から藤野台団地行きバス「市立博物館前」下車
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町 1-684	0428-23-6859	JR 青梅線「青梅駅」下車徒歩 12 分
調布市郷土博物館	調布市小島町 3-26-2	042-481-7656	京王相模原線「京王多摩川駅」下車徒歩 5 分
瑞穂町郷土資料館	西多摩郡瑞穂町石畑 1962	042-568-0634	JR 八高線「箱根ヶ崎駅」東口下車徒歩 20 分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原 5	0428-86-2731	JR 青梅線「奥多摩駅」から小河内方面行きバス「奥多摩湖」下車
福生市郷土資料室	福生市熊川 850-1	042-530-1120	JR 青梅線「牛浜駅」東口下車徒歩 7 分
武蔵村山市立歴史民俗資料館	武蔵村山本町 5-21-1	042-560-6620	多摩モノレール「上北台駅」から武蔵村山市内循環バス三ツ木地区会館行き「村山温泉かたくりの湯」下車徒歩 1 分
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市 920	042-596-4069	JR 五日市線「武蔵五日市駅」下車徒歩 17 分
羽村市郷土博物館	羽村市羽 741	042-558-2561	JR 青梅線「羽村駅」西口下車徒歩 20 分 / コミュニティバスはむらん羽村西コース「郷土博物館」下車
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸 2-6-41	042-493-8585	西武池袋線「清瀬駅」北口下車徒歩 10 分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町 3-12-34	042-525-0860	JR 中央線「立川駅」南口から立川駅北口行きバス「農業試験場前」下車徒歩 5 分
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村 3221	042-598-0880	JR 五日市線「武蔵五日市駅」から小岩行きか藤倉行きバス「郷土資料館」下車
日野市郷土資料館	日野市程久保 550	042-592-0981	京王線・多摩モノレール「高幡不動駅」から百草団地方面行きバス「高幡台団地」下車徒歩 5 分
小金井市文化財センター	小金井市緑町 3-2-37	042-383-1198	JR 中央線「武蔵小金井駅」北口からココバス北東部循環⑩「小金井公園入口」下車徒歩 5 分
くにたち郷土文化館	国立市谷保 6231	042-576-0211	JR 南武線「矢川駅」下車徒歩 8 分
東大和市立郷土博物館	東大和市奈良橋 1-260-2	042-567-4800	西武拝島線「東大和市駅」からイオンモール行きバス「八幡神社」下車徒歩 2 分 / 多摩モノレール「上北台駅」からちよこバス外回り「八幡神社」下車徒歩 2 分
パルテノン多摩歴史ミュージアム	多摩市落合 2-35	042-375-1414	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩 5 分
東京農工大学科学博物館	小金井市中町 2-24-16	042-388-7163	JR 中央線「東小金井駅」南口下車徒歩 9 分
江戸東京たてもの園	小金井市桜町 3-7-1	042-388-3300	JR 中央線「武蔵小金井駅」北口から西部バス「小金井公園西口」または関東バス「江戸東京たてもの園前」下車
たましん歴史・美術館	国立市中 1-9-52	042-574-1360	JR 中央線「国立駅」南口前
御岳美術館	青梅市御岳本町 1-1	0428-78-8814	JR 青梅線「御嶽駅」下車徒歩 20 分
東京都埋蔵文化財センター	多摩市落合 1-14-2	042-373-5296	京王線相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩 5 分
集合住宅歴史館（都市再生機構都市住宅技術研究所）	八王子市石川町 2683-3	042-644-3751	JR 中央線「八王子駅」・京王線「京王八王子駅」から宇津木台行きバス「ケンウッド前」下車徒歩 5 分
多摩六都科学館	西東京市芝久保町 5-10-64	042-469-6100	西武新宿線「花小金井駅」北口下車徒歩 18 分 / 西武新宿線「田無駅」北口からはなバス「多摩六都科学館」下車
国立ハンセン病資料館	東村山市青葉町 4-1-13	042-396-2909	西武池袋線「清瀬駅」南口から久米川駅行き・所沢駅行きバス「ハンセン病資料館」下車
八王子市こども科学館	八王子市大横町 9-13	042-624-3311	JR 中央線「八王子駅」北口・京王線「京王八王子駅」から西東京バス「創価大学循環（八日町経由）」・「みつ台」行き等「サイエンスドーム」下車徒歩 2 分